

教育が「地域に根ざす」とは？

前田 晶子〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

Education as "Community-Based Practice"

MAEDA Akiko

キーワード：地域に根ざす教育、森垣修、但馬の民間教育運動、地域と教育、八鹿高校事件

1 「地域に根ざす」を考える

「地域に根ざす教育Community-Based Practice」という思想は、戦後日本の教育、中でも民間教育運動において重要な主題の一つであった。特に国家統制が強かった戦前の教育を転換させ、教育の役割として教育基本法の掲げる民主主義社会の実現に向けたプロジェクトを推進するうえで重要なものであったといえる。「地域」概念は、そういった戦後の文脈の中で登場し、豊かな実践を生んできた。また同時に、公教育がどのような社会基盤の上に形成されているのか、教育実践のよって立つ場の構造へのまなざしもまた、この思想の流布につながったといえる。つまり、「地域」は、教育において、変革の理想であると同時に変革の対象でもあるという意味で、中心的な位置を占めてきたと考えられよう。

もちろん、戦前においても、地域と学校を有機的につなぐ努力はあったし、そもそも地域と無交渉では学校自体が成立しないことも事実であった。しかし、その際には、「地域」とは言われず、「村」や「生活」「地方」といったいわば都市化が進む中での共同体の論理に引きつけてのものであったと思われる。それに対して、戦後の「地域」概念は、むしろ民主主義や国民主権、平和や福祉と結びついたものであったのではないだろうか。

とはいえ、「地域」概念の内実は一枚岩ではなく、必ずしもその意味するところが共有されていたわけではなかった。例えば1970年代の高度経済成長期の終盤で、「地域に根ざす」をめぐって対立的な構図が指摘されていた。それは、「同化としての社会参加」対「変革主体形成としての社会意識の形成の教育実践」（佐貫：1980）とい

う、〈教育と社会〉の関係把握が逆転した地域の捉えがあったことにもうかがうことができよう。

ところが、グローバル化が進む現代社会において、「地域に根ざす」という観点は新しい展開を見せているといえる。たとえば、これまでは「地域に根ざす」といえば、義務制の小・中学校の教育が主たる場であったと思われるのだが、近年の語彙の使用傾向をみると、「地域に根ざす病院」や「地域に根ざす企業」「地域に根ざす大学」といった、より広い文脈で登場しているように思われる。地域振興、地域の活性化、地域を元気にするという場合の「地域」への価値付けは、必ずしも人々の生活圏を住民自身が民主的に作り上げようという発想ではなく、サービスや生産効率の向上、また新しい産業やビジネスチャンスの開発が企図されているように思われる。従って、教育における「地域に根ざす」思想は、これらの新しい文脈のなかで問い直す必要があるだろう。

「地域に根ざす」ことの意味の問い直しは、単に地域の教育力の弱体化問題としてではなく一地域を古い意味での共同体とするこの種の議論はすでに現代においては見通しがないだろう一、近年の「平成の大合併」、そして少子化の中で学校統廃合が進行している中で、公教育制度そのものが物理的に変容を迫られている中で、実践上、政策上ともに喫緊の課題といえる。

また、OECDのDeSeCoプロジェクトで提起されたキーコンピテンシーにおける三つのカテゴリ¹に示されるような能力像などと対置した際に、日本の「地域に根ざす教育」はどのように説明されるのか、そういった新しい文脈での検討も求められていると考える。

2 兵庫県但馬の教育運動史

本稿では、「地域に根ざす教育」の一潮流として著名な兵庫県但馬地域の教育運動に着目し、戦後の運動の担い手の一人であった教師に注目したい。森垣修（1932年-）は、1979年に『地域に根ざす学校づくり』（国土社）で地域に根ざす教育実践の代表的な取り組みとして注目を集めた人物である。彼は、奥丹後の渋谷忠男らとともに「地域と教育の会」（1976年-）を立ち上げ、その教師人生を通して、「地域に根ざす教育」を実践し、追究した人物である。

さて、森垣の教育実践については、これまでも教育研究者の注目するところであり、また森垣自身によって実践記録のみならず、但馬の教育運動史研究などの仕事が蓄積されている。筆者は、彼の最初の勤務校である兵庫県豊岡市豊岡小学校の学校文書を用いた共同研究（久富：2009、高津：2006）に参加し、学校文化と教員文化、そして地域教育実践活動の研究において森垣の実践に触れてきた。彼は、長年に渡り代表を務める「地域と教育の会」（兵庫）とともに、歴史教育者協議会（兵庫）、教育科学研究会（兵庫）、地域民主教育全国交流研究会など多くの民間教育団体に属している。それらの多様な活動の中で、一貫して追求されているのは「地域に根ざす教育」の思想である。では、彼の「地域」概念はいかなるものなのだろうか。ここでは、その外延と内包をつかむことを試みる。

そのために、本稿ではあえて主に彼の勤務校以外での活動、それもとりわけ教職を退職した後の活動に焦点をあてる。一つは病院をつくる運動であり、もう一つは中国の教育運動との交流である。本稿がこのような方法をとるのは、「地域に根ざす教育」を学校制度の外側との関係で問わなければ、その外延と内包が見えてこないことがある。たとえば学校づくりと病院づくりにおいて、森垣の教育思想はどのように現実化において違いが生まれるのか、またそこでの「地域」概念の共通する質は何か、といった比較論が必要である。

もう一つは、「地域に根ざす教育」の場としての学校が、現在では最も困難を抱えているのでは

ないかということがある。特に、急ピッチで進んでいる学校統廃合の下では、地域に根ざすことはもとより、制度の維持そのものの危機に直面しているといえる。森垣もまた、退職後の自身の活動を「現代の困難な教育・学校への応援団」（森垣：1998）と位置づけている。このような、学校単独での実践の困難性という状況において、森垣の退職後の活動がどのように学校を支えようとしているのかに着目することとする。

森垣の「地域に根ざす教育」を検討する前提として、但馬地域の戦前の教育運動について触れておきたい。生活綴方サークルの「但馬国語人」には、その組織者であった浅田正雄、戦後に『村を育てる学力』を書いた東井義雄など豊岡小学校を場として展開された生活綴方教育運動と、啓明会に参加し『プロレタリア教育の足跡』を書いた池田種生、神戸の御影小学校で新教・教労運動の指導者だった倉岡愛穂と歩みをともした下村鋼三（森垣の叔父にあたる）などのプロレタリア教育運動の二潮流があり、それが戦後の但馬の教育運動に流れているといわれる²。両者の交流を示す証拠は今のところなく、その実態は不明な点も多いが、ともに「農村」「寒村」において学校教育は何をすべきかを問題にし、中央の教育に追随する指向性に真っ向から対立していた点では共通している。

このような戦前の潮流が戦後の但馬の「地域に根ざす教育」運動に流れていることは間違いないにしても、「農村」がそのまま「地域」概念に衣替えしたわけではない。そこには、共同体の人づくり文化の伝統を深層に湛え、それを引き継ぎつつ、しかし1で述べたような敗戦を経ての平和の民主主義的追求という教育的価値として新しく生じたものとして位置づける必要があるだろう。この連続と非連続を、本稿では八鹿高校事件をはじめとする当地域の経験に即して、最後に考察したい。

3 病院づくりへの「シフト」

先に触れた森垣の退職後にスタートした二つの取り組み（病院づくりと中国との交流）については、森垣自身の報告がある。そこには、それぞれ

次のような記述がなされている。

私がいま打ち込んでいる地域の運動は、全ての住民といっしょに、地域の福祉や医療を語り、住民が主人公として生きる地域づくりをすすめる運動です。その意味では、学校に軸足を置いた府中小学校や静修小学校の教育運動から一歩飛び出して、居住地に軸足を置いた運動への発展であり、こうした地域づくりが、現代の困難な教育・学校への応援団であることを実感しているのです（森垣：1998、78頁、傍点引用者）

〔地域と教育の会〕 こうした考えに立って運動をすすめてきましたが、地域教育運動がお国自慢に流れてしまう弱さをどこで打ち破るのか、渋谷氏との話し合いのなかから私が見つかった回答は、「地域論は世界的な視野で考える必要がある。アジアの民衆との連帯のなかに二十一世紀の希望がある。侵略した国の庶民と侵略された国の庶民の連帯のなかに、運動の質的な高まりと広がり期待できるのではないか」ということです。（森垣：2000、77頁、傍点引用者）

ここには、二つの取り組みが共通して、「地域に根ざす教育」を特定の地域の固有の場からより広い文脈に移して考えようとする方向性がみられる。

まず、病院づくりについてみていこう。

森垣は、1992年に退職し、但馬地域の診療所づくりに向けて活動を始める。最初に取り組みしたのは、年金者組合の結成と、さらに当組合を中核とした但馬労働組合総連合の結成である。そのような中で、人的、また資金的土台が形成されていき、診療所づくりの準備が進められていった。

1992年には医療生協準備会が発足する。また同時に、全日本民主医療機関連合会（民医連）の医師などを呼んでの医療懇談会や講演会が実施され、診療所づくりの趣旨を地域で共有する取り組みが重ねられた。森垣は、特に、「医療生協活動とはなにか」を労働組合などの団体に伝えることに力を注いだと述べている。そのような各団体の橋渡しが、「住民主体の医療」という理念のもとで進められていったのである。

また、診療所予定地から周囲1キロ圏内にある家庭を訪問し、組合への加入を求めていく活動も地道に続けられた。そのなかで、医療に対する住民の声や要求が引き上げられ、住民主体の医療を実現しようという思いが共有されていったという。折しも1995年には中核病院である公立豊岡病院の空港周辺への移転問題が浮上し、署名活動では1万人を超える署名が集まるなど、この地域の医療に対する不安や不信が表面化していた。

この問題については、のちの2008年に、医師不足問題や公立病院の診療所化³をめぐる医療シンポジウムが開催されている。ここには、豊岡、八鹿の公立病院を始め、出石医療センター、但東町の高橋診療所⁴、ろっぼう診療所の代表者らがパネリストとして名を連ね、地域医療を守り、充実させる取り組みが重ねられている。

このような診療所づくりの取り組みには、長い前史がある。生野鉱山や明延鉱山などの鉱山労働者にみられる削岩機の振動による白蟻病や珪肺病、ちりめん工場労働者の聴覚障害の職業病問題が1970年代に発生し、1981年には「但馬の地域医療を考える会」が設立され、職業病認定の活動が進められていった。その他にも、1980年代から但馬の地域医療を考える医系学生の交流集会在行われ、医療者の側からもこの地域の病院づくりが検討されていったという⁵。この流れは、先にみた2008年のシンポジウムにも繋がってくるものと思われる。以上のような経緯があって、1996年6月に「ろっぼう診療所」が設立するのである。

1995年設立のたじま医療生協について、専務理事の西垣栄氏へのインタビューを中心にその概観をまとめよう。現在の組合員数は三千人規模、定款地域は兵庫県の北側の約四分の一にあたり、全11支部⁶において地域活動が行われている。「ろっぼう通信」が発行され、2012年3月には100号を数えている。この通信の編集は森垣が担当しているが、組合員への配布は旧豊岡市内においては「手渡し」で行われているという。通信の配布を通じた顔の見える関係づくりは、健康をお互いにまもっていくために、地域医療を支える重要な取り組みとなっている。ろっぼう診療所がある豊岡市へ通うには定款地域が広域であるため、現在旧

市内に限定はされるが、ボランティアによる送迎も行われている。

ろっぼう診療所は、医療部門の診療所と、医療と介護の両方に関わる訪問看護ステーション（24時間対応）に加えて、2005年には介護事業所が立ち上げられている。2004年の台風23号による大水害は記憶に新しいところであるが、これにより診療所が水につかり、経営危機に直面することとなる。ここから介護事業が開始され、在宅医療の重視（在宅療養支援診療所）や、医療と介護の連携（利用者に関する情報の共有など）といった事業を展開することにより、2009年には累積赤字の解消に至っている。また、民医連が行っている原爆症認定の活動も、2007年以降但馬地域で実施されるようになり、これまでに約10名が認定を受け、被爆者手帳を取得するなどしている。

西垣は、危機を乗り越えてきたろっぼう診療所においては、地域の医療を充実しようという強い意思とともに、医療者の労働条件の整備や学習活動の重要性を痛感したと語る。日常の業務のなかではなかなか時間が確保できないものの、看護師の学習会や若い親への子育て支援講座も開かれているという。

さらに、水害の際に民医連から支援を受けたことへの恩返しとして、東日本大震災の折にも看護師を派遣するなど、若い医療生協ではあるが着実にその活動を広げていると語った。

4 医療と教育のつながり

森垣は、鳥取生協病院長の守山泰生の講演会（1000名達成記念レセプション、1994年9月）で「住民が主人公の医療」というコンセプトが教育の課題とそのままつながるものであることに感銘を受けると同時に、このような医療観は日本の民間教育運動や国民の教育権論から学ばれたものであることを知り、驚いたという。そして、次のように述べている。

いま教育現場が未曾有の困難にあるとき、子ども・父母・住民が、教育改革の主体として学校に参加する道筋を、民医連の運動論からもう一度学び返す必要があると思うのです。（森垣：1998、74頁）

このような発見は、「地域に根ざす教育」を民主的な地域医療という回路を通して深める指向性を生んでいる。ここから森垣は、退職後の活動の「教育・学校への応援団」という位置づけを再確認するのである。

さきにも触れた看護師の学習会や、若い子育て中の世代の学習会は森垣を中心として行われている。前者は、診療の繁忙化で現在はなかなか時間を確保できないということだが、後者については、森垣の教員時代の実践を中心に行われているという。父母や地域とともに教育内容をつくり実践してきたことや、祖父母の生き方や村の歴史に子どもが学び、「葬式に子どもが弔辞を読む」といったことが学校の学びの中から現れてきたこと、実態調査から子どもの生活リズムが乱れていることや身体の育ちのおかしさに気づき、家庭の人間関係や地域の共同の回復こそが子どもを育てるのだということを伝えているという（森垣：2007a、森垣・野々垣：2009）。そして、学校が生きていくためには民主主義的な組織づくりが大切であり、親として学校や教員を支える関わりが大切であることを話しているという。

20代の親が森垣の教育実践の経験をどのように聞いているのか。子ども世代と祖父母世代をつないで地域の学習運動をどのように理解したのだろうか。しかし、この学習会の位置づけを考えると、高齢者医療の充実と周産期・小児医療の確保が都市部への人口流出を防ぎ、また帰郷運動を進めるという地域医療の課題に、森垣の教員時代の「地域に根ざす教育」が両者－高齢者と子ども（小児）－をつなぐ学習運動の方向性を与えているといえるのではないだろうか。「教育・学校への応援団」は、翻って医療の抱える危機を突破する道筋ともなりうることを示唆している。森垣自身も、近年の市町村合併が、「地方自治体を作った公立病医院の集約化と学校の統廃合が同時に住民に襲いかかって」いるとして、共通の課題と共同の運動論を提起している（森垣：2008）。

診療所では、上述の活動以外にも、勤務医が小児科専門医であることもあり、小児の予防接種のプランづくりの指導や、地域の健康講座で子育てがテーマとして取り上げられるなど、医療と教育

の連携というテーマが模索されている。他にも、診療所で月一回行われているアレルギー外来をきっかけに、アレルギーの子をもつ親の会「ひまわり」も結成されている。

5 中国の社区教育運動との交流

次に、「地域と教育の会」における中国との交流についてみていきたい。2005年に結成30周年を迎えたこの会は、熊本県人吉において「国際研究集会」として中国から研究者を迎えて行われた。このことは、いかに中国との交流がこの会の中心の一つとして位置付けているかを物語っている。

この国際交流は、森垣によれば、1995年に天津市で行われた「日中地域教育国際研究集会」が主発点であるという。この交流が、「住民が主人公になった住民のための地域づくり」「父母（地域住民）・子ども・教師が中心になった教育づくり」を旨とする「地域と教育の会」にとってどのような意味を持つようになるのか。

その後、森垣は、1999年になって、晏陽初（1890-1990）の存在を知り、その思想が民衆に根づいた下からの教育運動」であり、「地域と教育の会」との国際交流の意味がここにあるという確信を得たという。また、彼の思想を展開しようとしている中国の教育研究者の存在にも感銘を受けたとしている（森垣：2000）。

2005年の研究集会では、中国と日本の国家や経済の流れの中で、地域と教育の課題はなにかに焦点化された議論が行われている。特に両国に共通する課題として「グローバリゼーションと言われる今の時代において、人類としての社会発展の共通の課題を認識し、協力して地域教育をつくるためには、人と人のつなぎ会い、若い世代間の対話が肝腎。」（金世柏・中央教育科学研究所）が提起されている。

森垣氏は、「地域と教育の会」30周年という節目と重ねて、この国際研究会の総括を次のようにまとめている。

…息の詰まるような教育現場を励ますにはどうするのか。集会参加をどう広げるのか。

現場の教職員の本音をしっかりと聞き届けること、いま教育現場に加えられている攻撃の本質はその厳しさとともにその裏側にみえる脆弱さを、大きな視野・国際的視野から見えるようにすること、そして、「意味のある学習」を求める子どもの声を受け止める、生活実感に基づいた子ども達の問いかけに出来る学びが、分かる喜びを創ることです。

…地域と学校の共同をつくり出す新しい地域教育論を指し示し、展望を持ち合うという、ごく当たり前なことしか考えつかないのです。（森垣：2005、傍点引用者）

国際的な視野の下で、「ごく当たり前なこと」をいかに実現していくか。この文面からは、「地域に根ざす教育」とは、地域住民と子どもの「問いかけ」に、学校教員も自らの問いを重ねながら参加し、生活の場で学習を実践することを長年追求してきた森垣の、改めての願いが伝わってくる。

2010年、河北師範大学に地域と教育の会が誕生し、その記念として行われた「河北師範大学中日社区教育研究会」に森垣も参加している。彼はその会の挨拶で、戦争中の人間の残虐な行為と、近年のアメリカ軍普天間基地移転問題などに触れながら、国際交流を民衆レベルで続けることの意味と、また同時に日本各地において行われている実践—それは巨大マンションにおける町内会づくり、過疎の進む村での自然や歴史を学ぶ取り組み、農業体験や自然教室など多岐にわたる—を紹介し、日本と中国の交流の土台をどう豊かにしていくかを提起するものである。

改めて、森垣の「地域に根ざす教育」は、生活の土台（人々の営みの歴史）に学ぶことを通して子どもが育つ教育であり、その学びには系統性があることが指摘されている。このことは、この中国との交流から明確に再提起されているように思われる。

では、森垣のこの「地域と教育」把握—地域に学ぶことが民主的な地域づくりにつながる—は、どのように形成されてきたのだろうか。最後に、この点を考えたい。

6 生い立ちと、1970年代の経験

森垣の「地域」概念の形成について、二点に渡って考えたい。一つは、彼の生い立ちである。2で述べたように、森垣は教員生活の中で、但馬地域の戦前の教育運動に学ぶようになる。その過程で、下村(森垣の母方の姓)家にその教育運動に関係した人物が何人かいたことの発見が、彼を大きく方向づけたことがライフヒストリーで語られている(久富：2009、森垣・野々垣：2009)。とりわけ、兵庫県の新教・教労運動に関わった下村鋼三は森垣の叔父であり、鋼三の教員生活を調べ始めた森垣を評して家族の中では彼を「鋼三の跡継ぎ」と位置づけていたという。鋼三の他にも、同じく叔母の松尾(下村)みよという日赤病院の看護師がいる。彼女は、従軍看護師の記録などを残した雪永政枝というリーダーと懇意にしていた。この叔母に大阪のプロレタリア美術展に連れられていき、鋼三は日本版画協会の太田耕土と引き合わせられるなどして、指南されていったという。また、森垣の兄の金山輝雄(金山は森垣の結婚前の父方の姓)は、御蔵小学校から但馬の生野小学校に戻ってきた鋼三に影響を受け、雑誌『生活学校』(戸塚廉主催)の読者となっている。彼はその後小学校長、中学校長、公民館長などを経て、教育長(和田山)も務めている⁷。このように、戦前に、プロレタリア運動に携わった家族の存在が、森垣を民間教育運動へと方向づけていったことは、彼自身の語るところである。

和田山にある下村家は、他にも教員を多く排出している。母の弟である下村雅治は戦前の視学官であり、戦後は城之崎小学校校長や教育長を勤めた人物である。彼は雅号(四方木)を持ち、但馬豊岡藩藩主であった京極家への出入りもしていたという。また、森垣の兄弟にも、金山輝雄以外に教員がおり、家族から多くの教員が排出されたことは、森垣に多かれ少なかれ教員を身近な存在とし、また個々の存在が教員イメージの幅を広げさせたのではないかと考えられる。

下村家をもう一代遡ってみると、代々続く和田山寺内の庄屋であり、祖父の下村長蔵は村長を務めていた。蔵が3、4つあるほどの家であったが、長男が教員になり、現在では蔵が1つ残って

いるだけだという。

他方、父の金山浜治は、戦後最初の民選の選挙で1947年に和田山糸井村の村長となり、1952年まで務めた人物である⁸。兄も和田山の教育長であったことを考えると、地域の名士として代を重ねていたと考えていだろう。

戦争中は、森垣の兄3人が戦争に行き、一人は教員志望で生活綴方にも関心をもっていたが、士官学校に進学してのちにビルマで戦死している。もう一人は、満州からロシアの捕虜になり、戦後舞鶴に帰ってきたという。母親は毎日お経を唱えており、隣にいた小学生の森垣も暗唱するほどであったという。また別の兄は、陸軍の幼年通信兵学校で通信を教えていたために、兵役を免れている。このように、8番目の末っ子として1932年に生まれた森垣にとっての戦争は、出兵した息子を待つ母親の目を通して体験されたのではなかったであろうか。

彼が地域の歴史には系統性があるといい、「地域に根ざす教育」はこの歴史に学び、歴史から地域の未来を学ぶのだというとき、ここにみたような村の組織者からプロレタリア運動家までを含む彼の家族史のリアリティが重なってくるように思われる。歴史という場合も、著述された読み物だけではなく、祖父母の人生そのものを取り上げるのは、人間の生き様にこそその地域のなんたるかが反映するという立場があるのではないだろうか。

もう一つ、彼の「地域に根ざす教育」の転換点をもたらした但馬の部落問題に触れたい。

たじま医療生協理事長の前田貞夫は、「私は八鹿高校事件を機に但馬に来ました」(たじま医療生活協同組合：2006)と述べている⁹。病院づくりの前史は、実はこの事件が深く関係している。神戸医療生協など県内の民医連が負傷した教師を受け入れ、そのときに書かれた認定書がその後の裁判で大きな役割を果たしていくのである。また、病院づくりの資金集めにおいて高等学校教職員組合の存在が大きかったということだが、このことも八鹿高校事件にまで遡ることができる。つまり、但馬の病院づくりはまさに八鹿高校事件によって端緒が開かれたといえるのである。

1974年11月22日に発生した八鹿高校事件は、この地域を大きく揺るがした。地域の政治、また学校や教師の世界、そして住民や生徒らにとって大きな危機であった。森垣は、自身も勤務校である府中小学校において同和教育指導員（元解放同盟幹部）との問答を行い、また「人権と民主主義を守る但馬連絡会」を発足させて「但馬教育ニュース」（「さわらび」など）を自宅にて日刊で発行して但馬の教員に送るといった運動を行っている。そして、21年の長期に渡る裁判闘争を進めていったのである。

森垣は、なによりもこの事件によって「地域に根ざす教育」に向かっていくことになった、ということを経年のインタビューで語っている¹⁰。

質的転換、…その転換は戦いの中で転換された。それは偶然にまとまっていったんじゃないで、血の出るような戦いの中で全職員が共鳴して…

このときの実践が『地域に根ざす学校づくり』として1979年に出されるのである。その一節を引用したい。

また、子どもたちに民主的なものの考え方や行動のし方を育てるために、父母の願う人間形成のなかみを明らかにし、「父母の体験を語り聞かせる道徳教育」のとりくみにも着手している。暴力の野ばなし、金権、汚職の政治の横行のもとで、父母とともに生命の尊厳、自由と民主主義の大切さを子どもたちにきちんと教えていく課題である。（森垣：1979、166頁）

ここに八鹿高校事件のことは登場しない。しかし、まさにこの1970年代前半の当地域の経験が強く表明されていると読むことは、そう困難なことではないだろう。さらに、事件から33年を経た際の森垣の報告をみよう。

学校が、地域と深く協同するとはどういうことか、… [祖父母に学ぶ農業学習など] こうした協同こそが、分裂の危機に置かれた職場を統一し、外部からの教育介入を許さない学校と地域の主体性を確立す

るのです。（森垣：2007a）

八鹿高校事件を通して、労働者の健康問題、戦争、若しくは全国的にみて高い割合の小作料だったといわれる大正期の小作争議などにも遡る可能性も含めて、この地域の人々の経験が重ね合わされながら、危機を受け止めつつ何よりもそこに住む人々が主体となって乗り越えていくものとして、「地域に根ざす教育」が提案されているのではないだろうか。

森垣は、学校教員を退職した後も、組合づくりや病院づくりにおいて「地域に根ざす教育」を継続して実践しているといえるであろう。そこに軸足のシフトはあったとしても、断絶はみられない。

筆者は、「地域に根ざす」ことの現代的意味を問い直すとした本稿の課題から遠い地点に来てしまったのだろうか。しかし、ここでの検討を通して、「地域に根ざす教育」が単に地域で活動することではなく、地域教材を学校で用いることでもないことは明瞭である。ましてや、地域の情報化やネットワーク化、国際貢献といった歴史を飛び越えた地域研究でもないのである。地域の人びとの生活の営みの歴史（これを「たたかい」の歴史と言い換えてもいいだろう）に参加する学びは、まさに「地域に根ざす教育」であり、「危機の個人化」（U.ベック）が進行する中、いたるところで顕在化しつつあるといえよう。

参考文献

- 久富善之(2009)「学校文化の形成・展開と地域社会」科学研究費・基盤研究(B) [課題番号：18330178]「日本の学校風土・慣習の形成・展開と現代的再編課題」研究成果報告書
- 高津勝(2006)「日本の学校慣行・行事・儀礼の社会的・文化論的研究」科学研究費・基盤研究(B)(2) [課題番号：14310119] 研究成果報告書
- 佐貫浩(1980)「親・住民の教育力と参加論の検討－「地域に根ざす教育」における教育行政への発想」『東京大学教育行政学研究室紀要』第1号

たじま医療生活協同組合 (2006) 「たじま医療生協 ろっぽう診療所 設立十周年記念誌」
 森垣修(1998) 「地域のいのちを守る病院づくり」『現代と教育』Vol. 43
 森垣修 (2000) 「地域教育運動の国際交流」『現代と教育』No.51
 森垣修 (2005) 資料 「「地域と教育国際研究集会」から得たもの」
 森垣修 (2007a) 資料 「八鹿高校事件から三三年」
 森垣修 (2007b) 資料 「子どもが生き生き育つ学校」
 森垣修 (2008) 「公立病院や高校を守る運動と教育」『教育』国土社、9月号
 森垣修・野々垣務 (2009) 「ある教師の戦後史(9) 学校・地域に民主主義を求めて 森垣修さんに聞く」『人間と教育』Vol. 62

から但東町に来て、診療所の中に図書室や遊び場をつくり、さらに「高橋健康と医療を守る会」を結成して、医療活動を展開した。

- ⁵ たじま医療生活協同組合専務理事の西垣栄氏によると、民医連の院所は京都の綾部と鳥取県にはあるものの、兵庫県の北部には皆無という状況のなかで、地域医療への要求が民医連内部でもあったという。西垣栄氏へのインタビュー、2012年2月29日。
- ⁶ 旧豊岡市の5支部（新田・中筋、鶴城、神美、中南、北西）と、日高、きたみ、出石、香美・温泉、やぶ、朝来である。健康チェック運動などが行われている。
- ⁷ 教育長時代の金山輝雄については、部落差別問題への取り組みなど『和田山雑記』（並川實治、北星社、1993年）に詳しい。
- ⁸ 『和田山町行政誌』（和田山町史編集委員、1973年）には、「中学校建築の件に関して村長金山浜治は村会議員一同と共に、人心を新にする意図のもとに辞任している。」(43頁) とある。
- ⁹ 八鹿高校事件では、自由法曹団弁護士約300名が来たといわれるが、前田貞夫は八鹿・朝来暴力事件対策弁護士副団長であった。
- ¹⁰ 森垣修氏へのインタビュー、2012年2月28、29日。

¹ 「社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力 (Use tools interactively)」、「多様な社会グループにおける人間関係形成能力 (Interact in heterogeneous groups)」、「自律的に行動する能力 (Act autonomously)」という三つのカテゴリーでとらえられた能力観を物差しとして「地域に根ざす教育」を考えることも一つの現代の文脈における検討課題であろう。

² 森垣の作成した呼びかけ文「但馬教育運動史研究に御協力ください」(1970年6月26日付)にこの二潮流が示されている。森垣は、上述の但馬教育運動史に学びながら、それをよりどころとして教育実践を行っていった。前田晶子「7章、但馬の教育実践活動のペダゴジー的土台」(久富：2009)。

³ 具体的には、2007年に発表された再編計画では、①豊岡病院以外の日高、出石、和田山、梁瀬病院は「医療センター」に名称を変更する、②但馬地域の17人の県派遣医師を豊岡病院総合診療部に所属させる、③出石病院と梁瀬病院、村岡病院の県派遣医師を豊岡病院に異動集約する、といった医療機関の集約化計画が進められた。(森垣『「医師確保・公立病院守れ」但馬大運動』全国革新懇神戸集会報告、2008年)

⁴ この地域の農村医療の先駆的存在であり、新田誠院長は兵庫県保険医協会但馬支部長でもある。彼は京都